

深見名誉教授の人と学問

高橋泰藏

一

(1) 深見名誉教授の人と学問

深見義一博士は、本年三月末日をもって、本学教官申合せの停年退官の規定によって退官せられた。実をいえば、深見博士は、筆者と同じく昭和四年三月に、旧東京商科大学学部（当時の普通の呼び方によれば「本科」）を卒業したのであって、その意味では、筆者と同級生である。しかし深見博士は、旧制時代の「商学専門部」を卒業された後、一時名古屋商業学校に教鞭をとられ、その後、再び志を立てて、「本科」に入學されたという篤学の士であり、ある意味では、他に例のみられない苦学を經驗された人である。深見博士の人柄については、他にも、よく知る同僚があるであろうが、筆者は同級の故をもって、博士について格別の親近感をもつものであり、

本学において、文字通り同僚としての教授生活を共にしたことから、博士の人柄について最もよく知る一人であると自認し、またある意味で先輩教授として、常に博士の好意ある助言、援助を受けて来た間柄である。いま、博士の退官に逢って、一抹の、というには余りに大きい寂寥の感に耐えぬと同時に、心から感謝の意を表すものである。敢えて一文を草して、博士の退官を送る所以に外ならない。

ひとが、どのような道を、殊に学者の場合に、どのように学問の道を歩ゆんで来たかを語ることは、自分自身については、その困難は一層大きいものがあるだけでなく、むしろ大きい誤りを冒かす危険をさえ伴うことはいうまでもない。しかし、その反面、語られる当人の気

付かない面が、案外第三者によって見出されることもありうるであろう。筆者は今、ここで深見博士について伝記者としての用意をもっているわけではない。ただ、筆者が、博士と同級生であり、卒業以来同じ母校に職を奉じ、博士と最も長い交友関係にあったところから、博士を知る一人として自認するにすぎない。従って述べるところは、一面多少の客観性をもちうるかと思うと同時に、他面多分に筆者の主観的解釈を含み、さらに思いつくままの断片的なものであるにすぎない。予め博士の寛容を乞う次第である。

二

彼——以下では、同級生の誼みをもって、敢えて「彼」と呼ぶことを許されたい——について、まず筆者の記憶に最も鮮やかに想い起こされることは、彼が、われわれ同級生の卒業に当って首席をもって卒業し、卒業式に際して卒業生総代として謝辞を述べたときのことである。当時の単科大学としての東京商科大学の卒業生総代の謝辞は、文字通り首席の卒業生が述べることになっていた。このときの彼の謝辞について、二つのエピソード的

なことが伝えられている。一つは、エピソードというには適當でないことであるが、それまでの謝辞のきまつた型とせられていた言文一致的な、例えば「生等云々」という言葉ではじまる型を破って、彼の謝辞は、当時としては斬新な口語体で書かれ、読まれたことである。このことは、如何にも彼らしい人柄を示すものとして、当時最も好評を博したことであった。ただ、これには、いま一つのエピソードが加え伝えられている。もっとも、卒業式のときに、最後列に肩身狭く席についていた筆者は、必らずしも、それを確実に耳にしたわけではなく、あとから、人伝てにきいたことであり、その意味で、エピソードというのが適當であると思うものであるが、この伝えきいたところによると、彼の、この謝辞は、「私共云々」からはじめられ、それについて、来賓に対する謝辞を述べる段で、「上は文部大臣閣下より、下は学長閣下に至るまで貴臨を忝うしまして」といわれたということである。当時の「東京商科大学」は大正十二年の関東大震災の被害を蒙って、現在の一ッ橋の地にブラック建築で建てられており、われわれの卒業式の挙げられた講堂もブラックの建物であったが、立地上、文部省に近いと

(3) 深見名誉教授の人と学問

ころから、毎年、文部大臣が臨席される例であったので、来賓の最初に文部大臣を挙げることは、自然であり、また恒例であったようである。ただ、このとき彼は、「上は文部大臣閣下より、下は……」と述べられたらしく、このことのせいから、前列の方から、「ワーッ」という歓声の揚がったことだけは筆者も記憶している。ここで、「述べられたらしく」というのは、既にその歓声で、後列にいた筆者の如きは、何故に、そのような歓声が揚がったのかの理由を、そのときは知るよしもなかったのであるが、あとになって右のような事情からだと言えきいたにすぎないし、従って筆者にとってはエピソードとしか知りえないところであり、その真相が、どのようなものであったかは保証しがたい。しかし、このエピソード——敢えてエピソードといっておきたい——の伝えられたことは、彼のユーモアに富んだ人柄を反映したのもとしても解せられるであろうが、また、このことが、たとえば真相であったとしても、決して、彼の人柄を傷つけるようなものでないことは、いうまでもないところであろう。もし伝えられている、このエピソードが、誤りであるとするれば、このエピソードを伝えきき、また記しつつある

筆者は、彼に詫びなくてはならぬわけであるが、しかし、それはともあれ、彼が、このようなエピソードの持主であることを、この機会に書き記しておくことは、その真疑はともかく、彼の伝記資料の一齣を加えることとなるとともに、当時の、よき時代を表徴するものといってい

三

彼は一ツ橋の門をくぐるや、直ちに内池廉吉博士の指導を受け、当時、内池博士の担当せられた「財政学」と「市場論」の中、後者の「市場論」を承継いで、今日に至っている。彼の処女作は「世界経済総論」(昭和六年)と銘打ったものであり、筆者の如きは、彼の研究上の早熟ぶりに驚いたものであるが、それにもまして、今ふりかえてみて驚くことは、「世界経済」ということをテーマとし、これを書物の表題に掲げたものは、筆者の知る限りでは彼が最初であることである。このことは、彼が時代に一步先んじて問題をとりあげるといふ学問的感覚の持主であることを物語るものであろう。彼は、その年から昭和十年まで、商業学研究のため、アメリカ、ドイ

ツ、イタリアの諸国へ留学し、その研究成果は帰国後、続々と発表せられたのであったが、それらの何れも、例えば「マーケティング」は、当時アメリカにはじまった新たな研究領域であり、「小売商政策」「通信販売」「切符制度」の研究は、彼がドイツ留学中における収穫であるが、日本におけるこの領域の研究について先鞭をつけたものであり、彼の学位請求論文「プロダクト・ブランニング」は、彼のこのような時代に一步先んじた問題の提起と研究という才能を、最もよく示すものといえるであろう。のみならず、この時代に一步先んずる研究が、彼が停年退官という年齢においても持ち続けられて来たこと、そして今後も持ち続けるであろうことは、同級生ではあるが、後輩である筆者が、彼に兄事し、敬服を惜しまない所以である。

四

彼について、今一つつけ加え記しておきたいことは、彼が人並勝れて語学に造詣の深いことである。英、仏、独、伊語はもちろん、彼は希、羅語に至るまで、よく読み、駆使する。彼の書齋に、これら各国語による書物の

多いことは、彼を訪ねる人の知るところであろうが、彼と語る毎に、随時にこれらの言葉を耳にし、彼からの手紙を受ける毎に、これら異国語の挿入せられていることには、筆者は実は常に悩まされている一人である。上田辰之助博士の亡き今、彼は本学出身者として、恐らくは最も多くの外国語に通じている一人であろう。筆者はかつて、彼が外国語に造詣の深い理由について考えてみて、思い当ることがあった。それは、彼の口にし、書く外国語に、古い神話に現われる固有名詞、熟語の多いことであり、このことから、彼が神話に興味をもち、多く読んでいるのではないかということであった。このことを筆者は彼に尋ねてみたことがあったが、それは筆者の想像をはるかに越える程度のものであった。もちろん、彼は生れながらに、語学の才に恵まれていたには相違ないが、ここまで彼が多くの外国語に通ずるに至ったのは、彼が古い神話に異常な興味をもったことが大きい契機をなしたのである。外国語に通ずることが、さらに彼の神話への関心を深めたといえるであろう。彼は、その風貌に似合わず——などと書くと、彼から、その得意の何語かによって即座に抗議を申込まれるであろうが

(5) 深見名誉教授の人と学問

——ロマンチストであり、文学通であるというのが、案外に人に知られていない彼の一面であるかも知れない。このことと、彼の専門研究とは、一見したところ結びつきにくいようにみえるが、しかし、こう考えて来て、筆者は、実は彼「深見」という全人的なものの中に、それらが結びつけられ、統一されて、人間「深見」が出来、存在していることを感ずるものである。

率直に言って、彼は時に、正しく彼自身を理解せられなかったことがあるように考える。しかし過去三十五年に互る彼との交友を通してみると、年を経るに従って、その人柄に円熟味を加えたことは当然のこととし

て、常人にとってはむつかしい「知命」「耳順」の境地にも比すべき恬澹の域に達していることは、彼に親しく接するほどの人の知るところであると信ずる。彼への敬慕の念を今更に新たにす所以に外ならない。

このような境地に到りえたのは、或は、彼の一と頃の健康を害したことが契機となったかとも想像せられるが、最近における旧に倍した健康の回復は、彼にとつてはもとより、われわれにとつても慶ばしい限りである。未だに学問的耄碌を示さぬ博士の頭脳に期待すると同時に、今後における健康を祈るものである。

(一橋大学教授)